

1221

第八卷  
全七册内第

東蝦夷日誌三編

東 京 圖 書 館			
二	三	三	和書門
四	四	地類	
冊	號	架	函類

全



98  
Case 8  
shely 8

東國蝦夷山脈  
地璣身調新於

東蝦夷

誌二編

類編  
類 絶行  
冊 廿二  
函 十  
冊 二

東蝦夷地誌二編

東京  
博物館

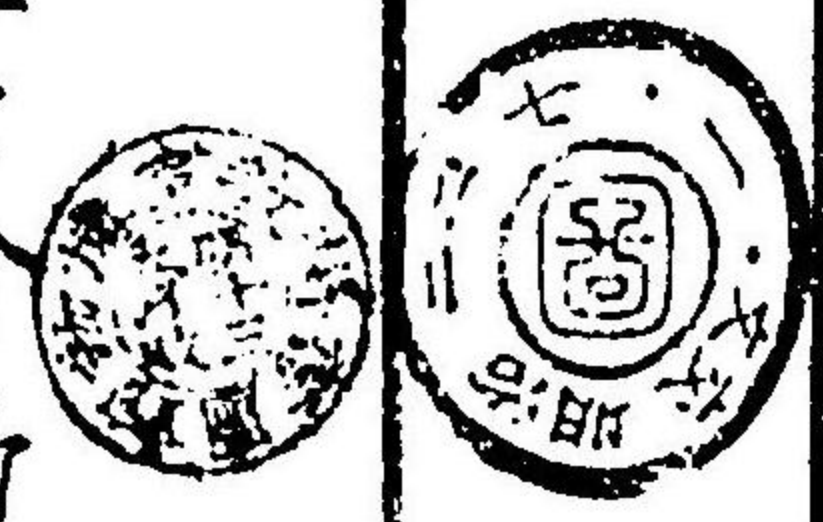
明治九年二月開

教育  
博物館

東京  
博物館

教育  
博物館

此はラムシヤの図様にあつてもる場々の者なり。此の如きものには、  
一川、海の名此二場所を他と異なりて、名を異くを以て又標のありき者  
也。



東蝦夷地誌二編



安部厚統一冊武加和結一冊毛武吉津結一冊沙流吉津結一冊を爲績  
ちしる

一義経ウキクルヒの身 跡妻地外ウキクルヒ方ウキクルヒ今ウキクルヒ所奈の社ウキクルヒ當所ウキクルヒ有  
存母ウキクルヒの玉人ウキクルヒ南所ウキクルヒの者ウキクルヒをウキクルヒ教ウキクルヒをウキクルヒ大ウキクルヒをウキクルヒ又ウキクルヒ言ウキクルヒ結ウキクルヒ七ウキクルヒ更  
地外ウキクルヒとして聊ウキクルヒをウキクルヒ當所ウキクルヒのウキクルヒまウキクルヒはウキクルヒまウキクルヒのウキクルヒ道ウキクルヒのウキクルヒやウキクルヒ園ウキクルヒ者  
又ウキクルヒ之ウキクルヒ言ウキクルヒのウキクルヒ一ウキクルヒ越ウキクルヒ月ウキクルヒ志ウキクルヒをウキクルヒ結ウキクルヒのウキクルヒ揚ウキクルヒまウキクルヒ計ウキクルヒ中ウキクルヒ一

杉浦の弘結

東帳夷日誌参編

伊勢 松浦竹四郎 著

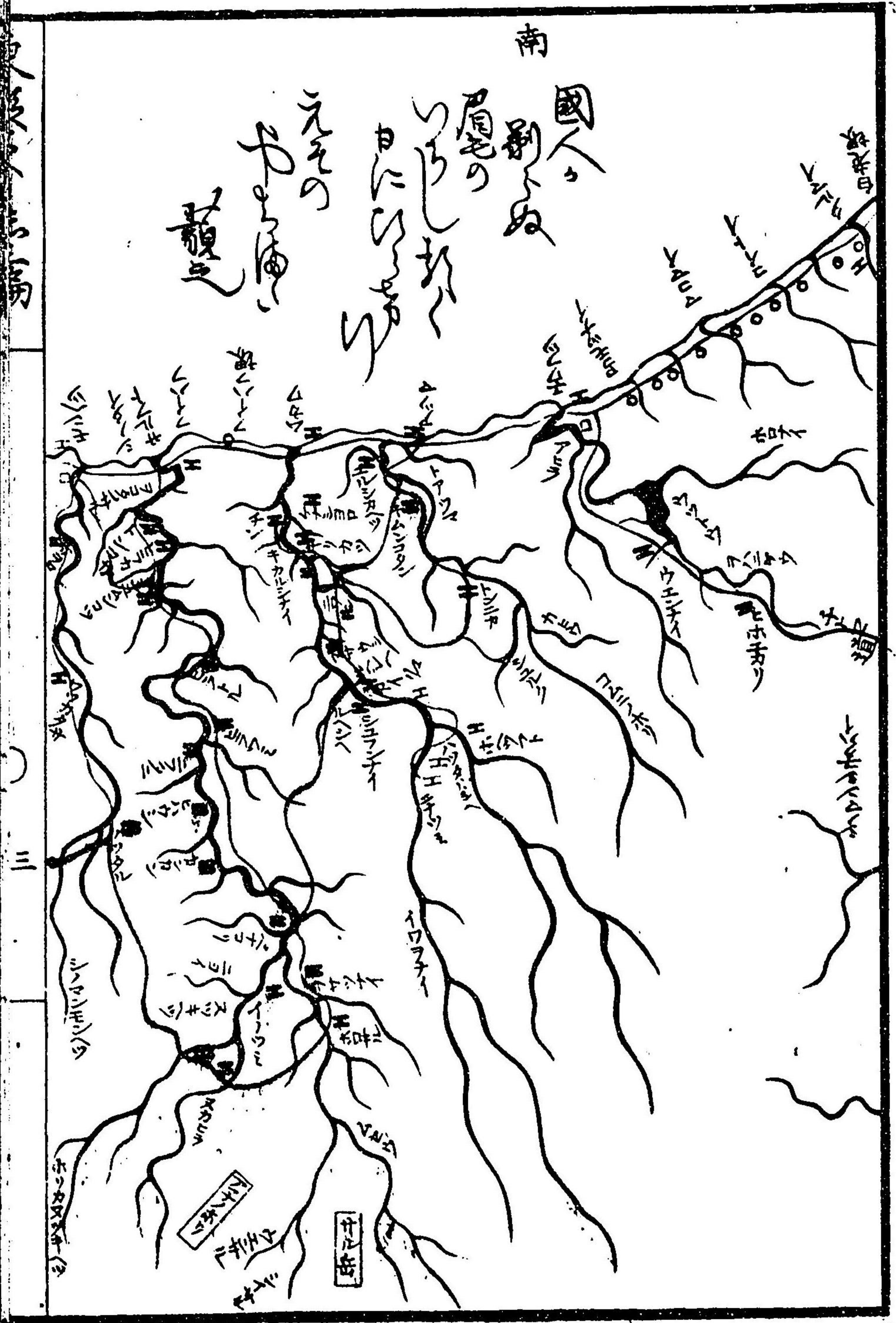
ユウブツ領

此をユウブツ南支の愛地ユウブツの沙流ユウブツ津ユウブツ打ユウブツ原ユウブツよりユウブツ上ユウブツ下ユウブツのユウブツ地ユウブツをユウブツ中ユウブツにユウブツ置ユウブツくユウブツ石ユウブツ一ユウブツつユウブツちユウブツく  
編ユウブツ屋ユウブツ左ユウブツ右ユウブツにユウブツまユウブツをユウブツ置ユウブツくユウブツはユウブツ村ユウブツのユウブツ地ユウブツをユウブツ中ユウブツにユウブツ置ユウブツくユウブツ石ユウブツ一ユウブツつユウブツちユウブツく  
夷人の里ユウブツをユウブツ思ユウブツひユウブツねユウブツまユウブツをユウブツ禁ユウブツむユウブツいユウブツんユウブツ方ユウブツをユウブツ一ユウブツ河ユウブツタルユウブツマイユウブツ小ユウブツ林ユウブツのユウブツ本ユウブツ名ユウブツヲ  
タルユウブツマイユウブツとして沙流ユウブツをユウブツ大ユウブツ之ユウブツ名山ユウブツ園ユウブツ結ユウブツ谷ユウブツ文ユウブツ小ユウブツ沢ユウブツ捐ユウブツ法ユウブツをユウブツ置ユウブツくユウブツ石ユウブツ一ユウブツつユウブツちユウブツく  
凡ユウブツ此ユウブツをユウブツ少ユウブツして春ユウブツ霜ユウブツ冷ユウブツとユウブツ日ユウブツ朝ユウブツ暎ユウブツ夕ユウブツ陽ユウブツのユウブツ一ユウブツ様ユウブツ々ユウブツ付ユウブツとユウブツ此ユウブツをユウブツ彼ユウブツ地ユウブツのユウブツ村ユウブツをユウブツ一ユウブツつユウブツちユウブツく  
まユウブツくユウブツ置ユウブツくユウブツはユウブツ一ユウブツ様ユウブツ々ユウブツ付ユウブツとユウブツ此ユウブツをユウブツ彼ユウブツ地ユウブツのユウブツ村ユウブツをユウブツ一ユウブツつユウブツちユウブツく  
有ユウブツもユウブツ一ユウブツつユウブツちユウブツくユウブツ置ユウブツくユウブツはユウブツ一ユウブツ様ユウブツ々ユウブツ付ユウブツとユウブツ此ユウブツをユウブツ彼ユウブツ地ユウブツのユウブツ村ユウブツをユウブツ一ユウブツつユウブツちユウブツく

東帳夷日誌参編



夕小抄の記しを文化二丑の秋七月再いし家小抄とすし其年焼く  
 由りて此處の記をすす下は焼くはるるにさう是受大陣の事との事も  
 るるに記すは岳のほりてニコツ湖の南に人たえの村あり是處を及野給期と  
 △川筋三分一左ホニタルマイ 右本川筋の保く岳の西にふるアニルウカ  
 申口  
 ホニタルマイ 小橋フニコタルマイ 古川にラボウ橋 後拾ふ所の入姓古川中より  
 後に出るにさうは此をよりニコツ湖の南に極難路の夕張の極難路の  
 事なるに橋を此地後を用る事ありありかた橋夫ラロツコタラ  
 イカスメリクル人好く後をきひしは地とては極古と後をきる事あり  
 是に金銀銅の鑛ありて余の記しは銅鑛限の是を記すに見るも小日本地ありと  
 して後抄の記しに余の記しは銅鑛限の是を記すに見るも小日本地ありと





今本邦赤眼を叙し用ひし方我々を怪し小男山懐を言物 神功  
 皇后の御劔并小は後序の刺小刀下聖皇利元所天社の神物等法家眼を  
 今時代より及りしものも言ふ希代の物を知得るも銅を以て兵器に用ひし事例少  
 くして容るる富北の地なる肥後國葦地郡福野寺村より掘りし銅鑿  
 も袋紙に又好古り録友貞并著小載る安藝國法蓮郡八幡の社地下より掘りし七枚  
 の銅鑿も其作彷彿しう固小抄卷二坤富口抄西時長祿韓延壽傳延壽又  
 取官銅物候月蝕鑄作刀劍鉤鐔漢書夏禹子啓在位十年以庚戌八年鑄一  
 銅劔長三尺九寸啓子太康在位二十九年歲在辛卯三月春鑄一銅劔秦  
 始皇在位三十七年以三年歲次丁巳採北祗銅鑄二劔吳王孫權以黃武五  
 年採武昌銅鐵作千口劔萬口劔陶弘景刀劔錄を引用し銅鐵を

兵意明修を考たりし古物此地小存するもの言ふ奇なるもの也此

此を今少りぬるも小海客の古物を持て今ふる栗本名跡字心附

廻浦の所次小圖を以て物を得しと今示るる作念を小書く縁あり

同く此地フニコニダラフフニコを古アメリハ新と云ニニダラフと云

一此川上森なるなる小川を以て今示るる縁ありと云フレバツ小ホニコイトイ

小コイトイ小川格も 名々流越え之フニコイトイ古ルハコ小川路也之

トウモマイ小川上河を以て今示るる縁ありと云フレバツ小マコマイ小川後至

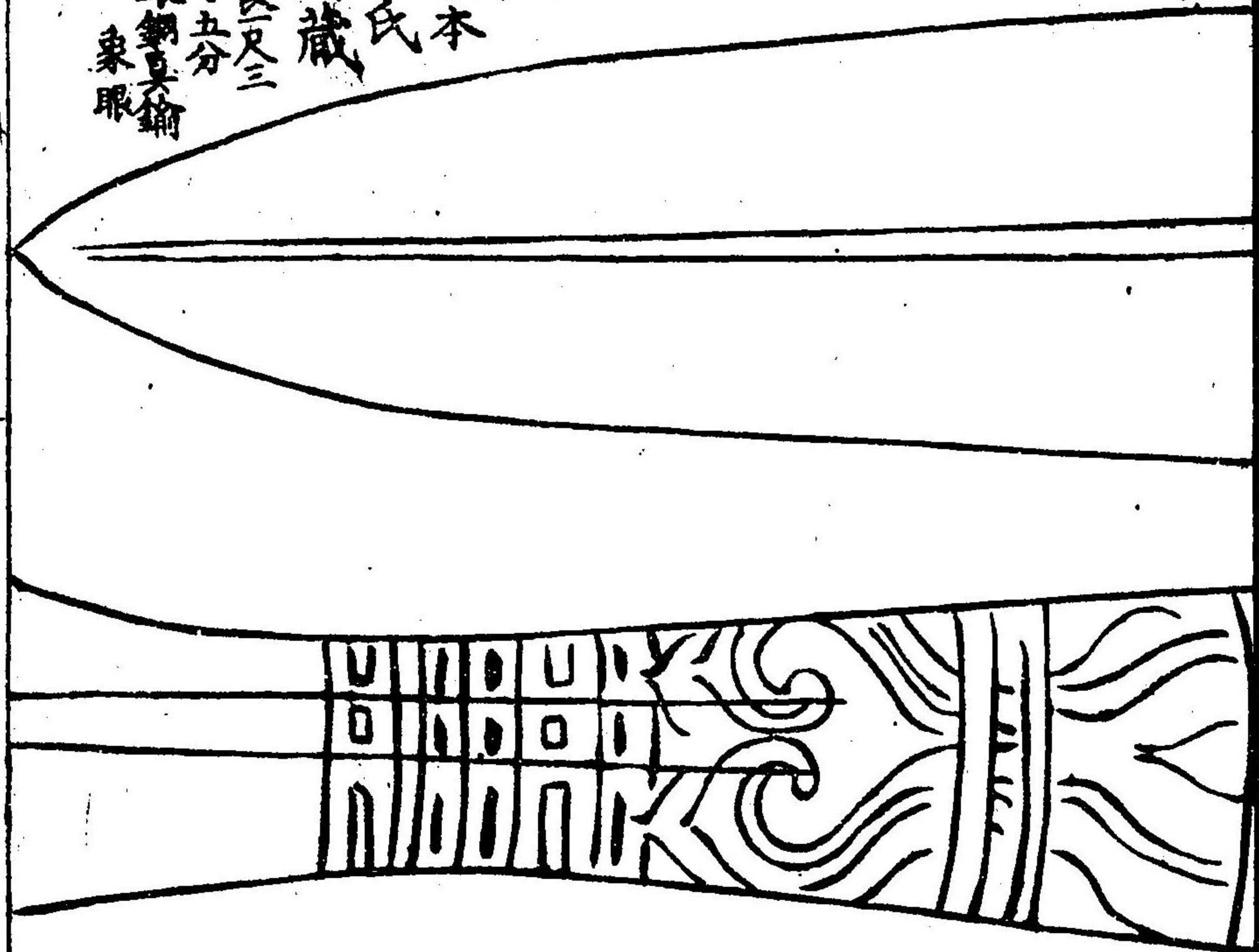
サツタフ小川流るる小流口モツナイ小黄顔奥川との云也

タナシリ本地小川流るる此の云と云く 是れトセ 是れトセ 是れトセ 是れトセ 是れトセ

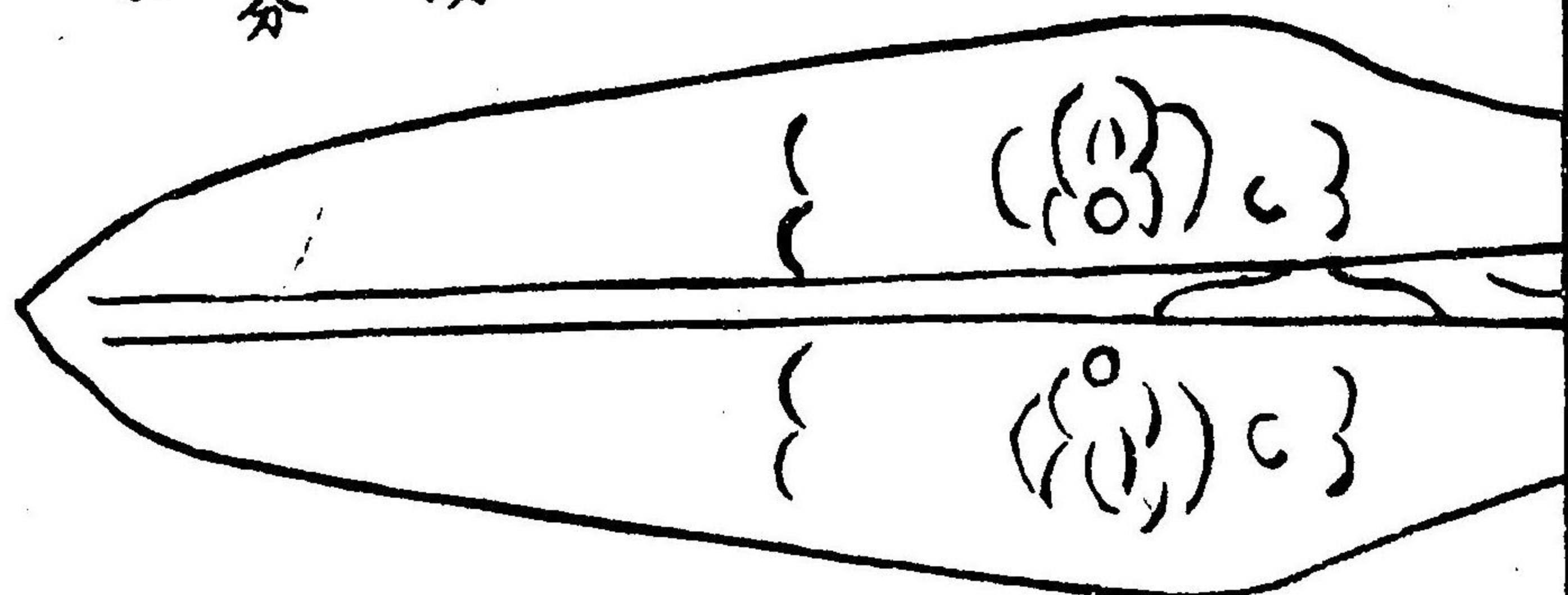
ユウフツ今心を示るる小川流るる此の云と云く 是れトセ 是れトセ 是れトセ 是れトセ 是れトセ



栗本  
所藏  
氏  
長一尺三寸五分  
銀銅具輪  
象眼

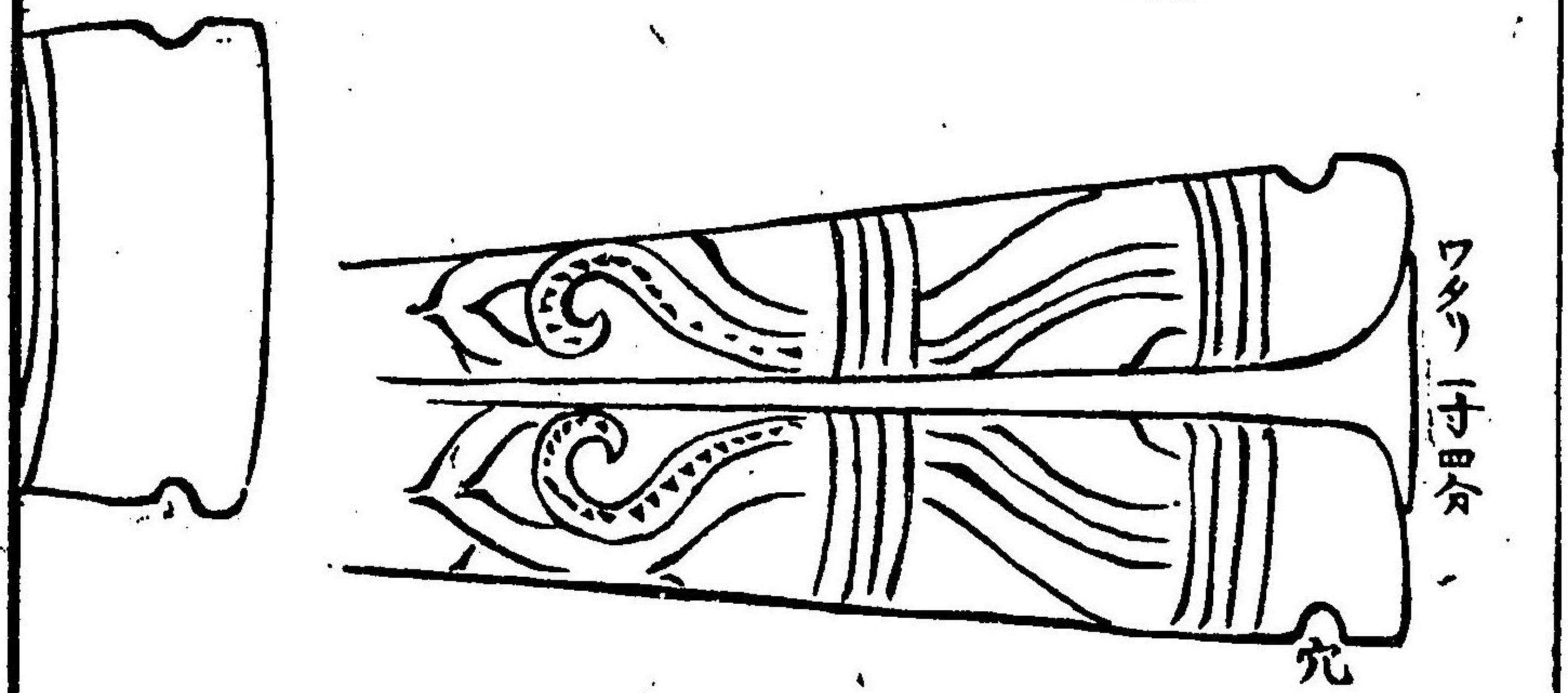
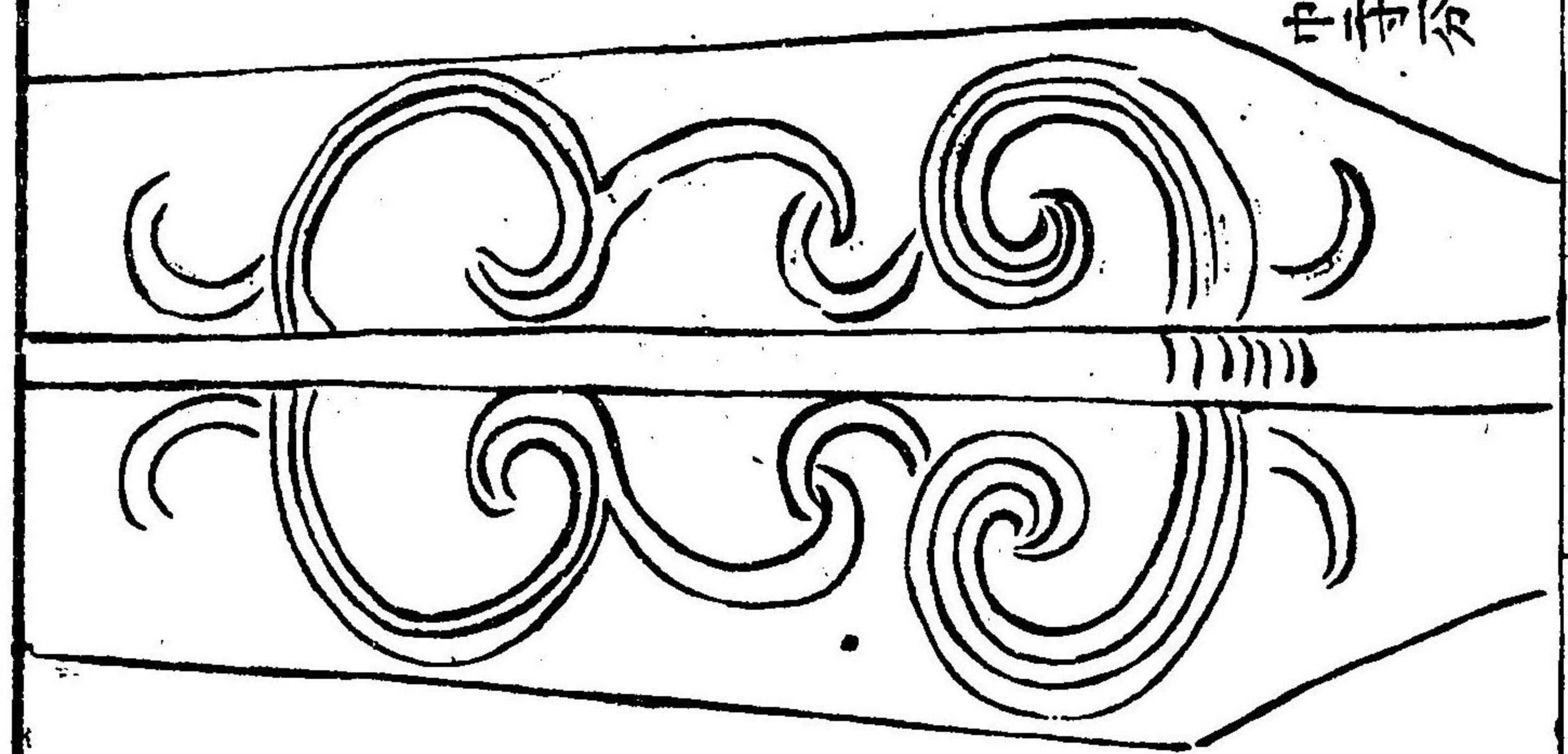


多氣志樓  
所藏  
長八寸二分  
五厘  
銅象眼



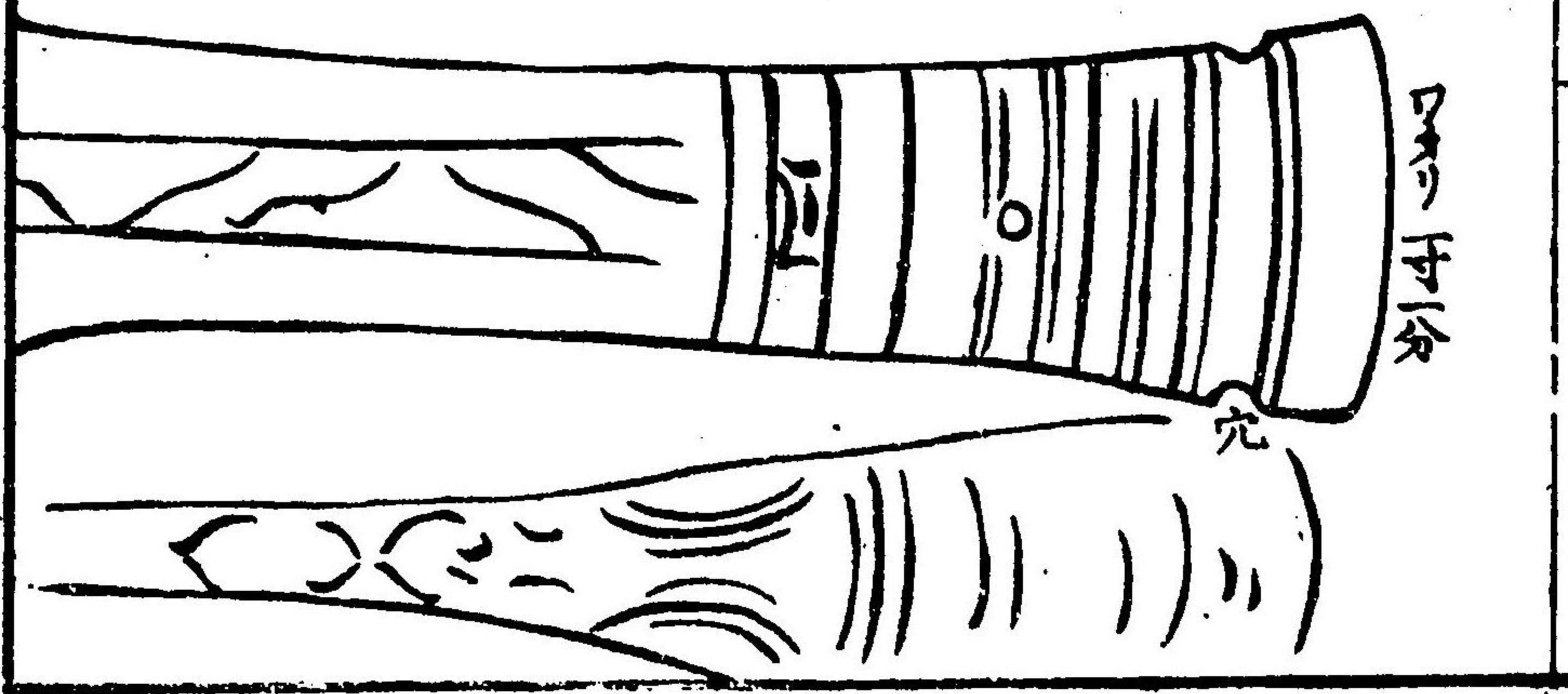
巾  
一寸五分

巾  
一寸五分



ワ  
多  
リ  
寸  
四分

穴



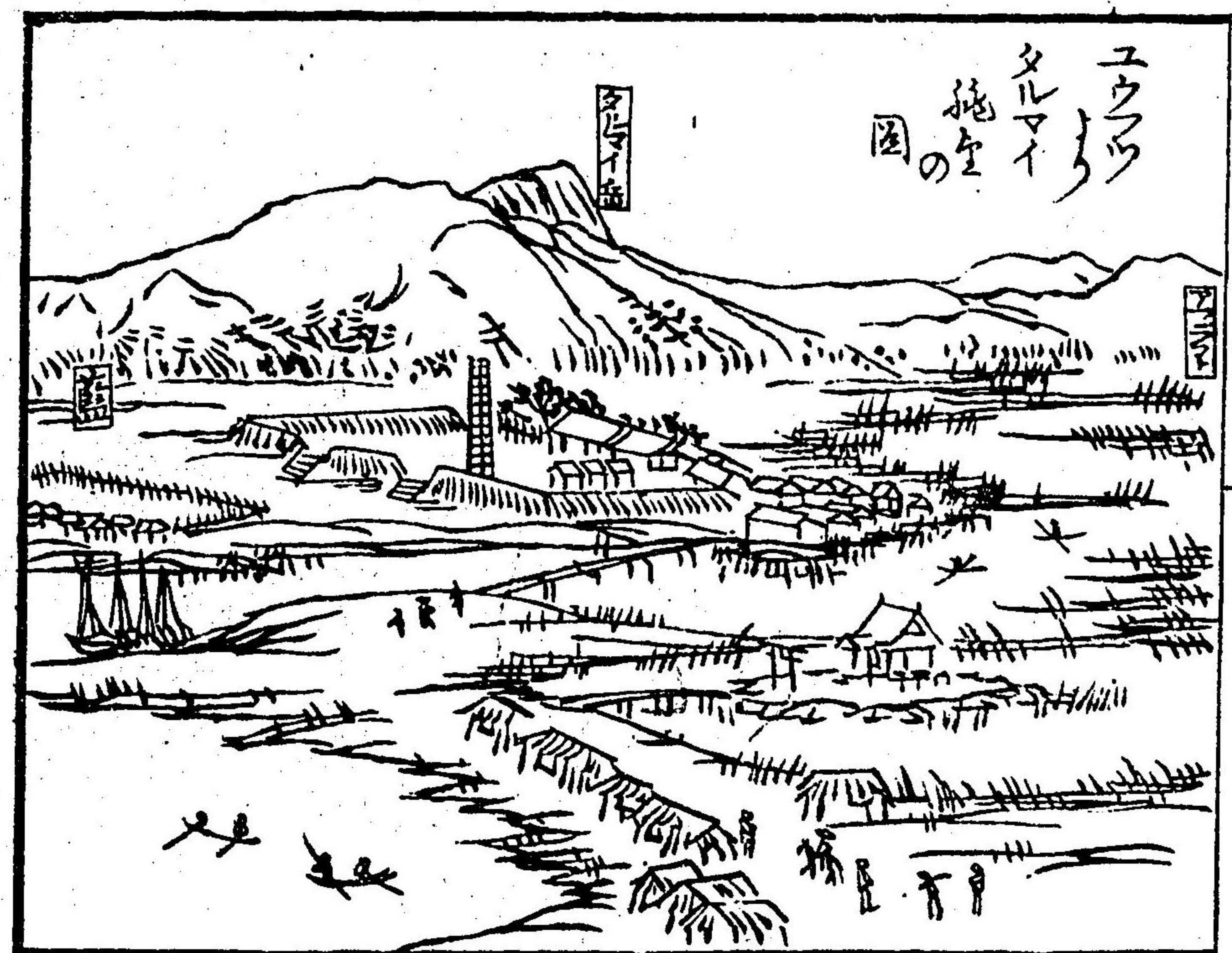
ワ  
多  
リ  
寸  
二分

穴

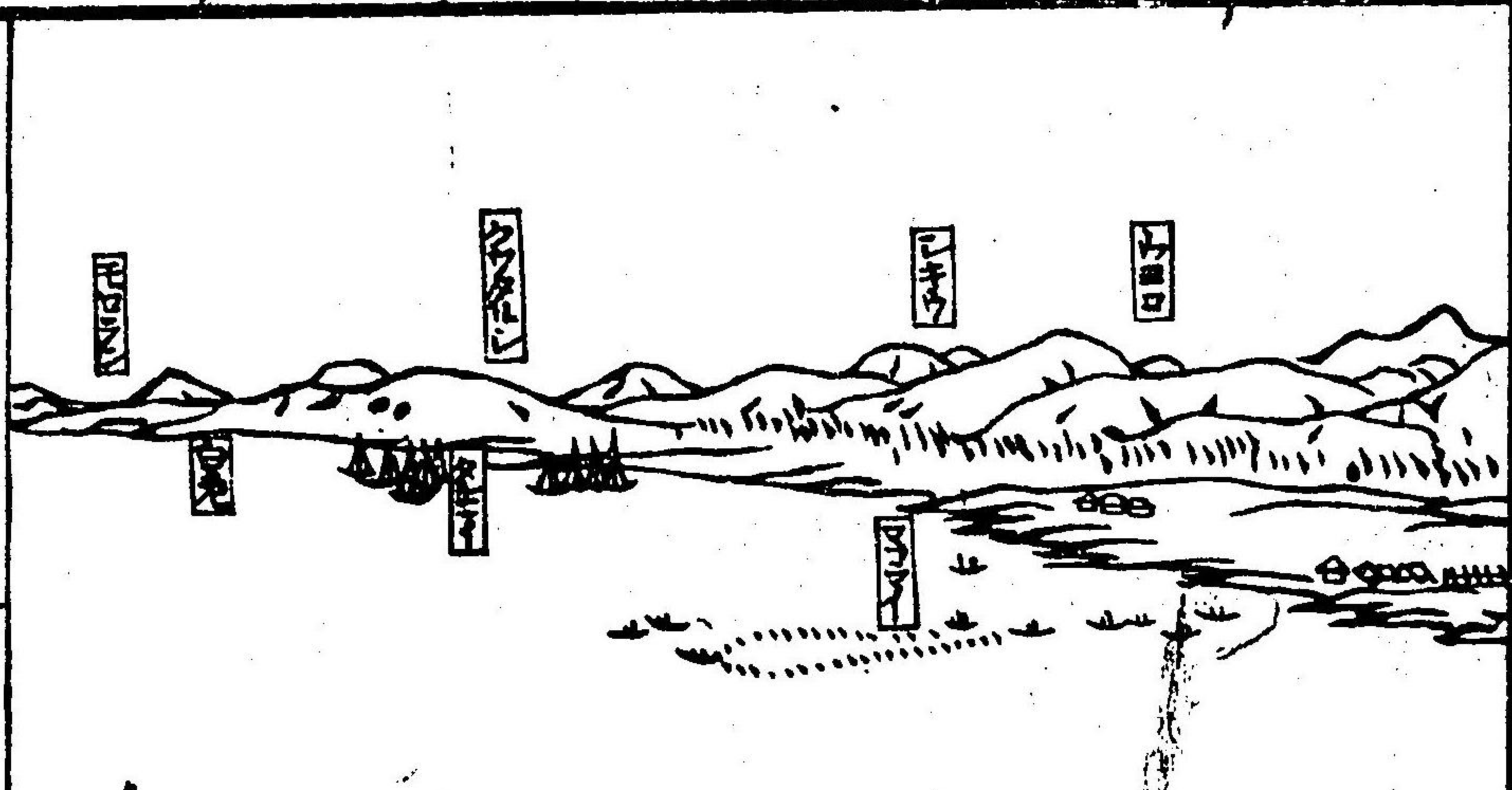








の美此川上の方へ流るるをくトア  
 ツマ川是アツマの枝也  
 アツマ 川の中平太 勢を宗給おるは  
 とサキモカと云歎々傳と城をくを  
 しく号とアツは歎の身とマを後  
 る久と又アツを木嵐のりもさり  
 △六月廿日 あつま 板橋をとおむアツマを  
 回る名板橋エカニ 台ワの身は  
 板橋 イナエ 板橋 イナエ 板橋 イナエ  
 ムカ此 イナエ 板橋 イナエ 板橋 イナエ



清和湯  
 少野子  
 板橋  
 板橋  
 板橋  
 板橋  
 板橋  
 板橋  
 板橋  
 板橋  
 板橋

連出とるるをくトア  
 此を港地返ニユニ 向小トイホチ  
 昔トウツツ此処をく  
 ヲシニハシ 板橋 イナエ  
 早くと宗家 イナエ  
 タニ人 イナエ  
 ヤムワカ イナエ  
 水 イナエ  
 新 イナエ  
 ち イナエ















あゝ鳥とてカキチヤシト  
皇此鳥ノ雷弁名矢根石を志とて  
チヤルセナ  
イ古小川人家ホロ又々味法屋甚し  
名岬を志とて人宗  
ニカルニシハトマクイト  
クイニ鳥の身ノ此鳥も  
四村ノ鳥ノ住ル  
在子母ノ鳥ノ今日  
見たり  
りりり

此鳥ノ身ノ此鳥も  
四村ノ鳥ノ住ル  
在子母ノ鳥ノ今日  
見たり  
りりり  
あゝ鳥とてカキチヤシト  
皇此鳥ノ雷弁名矢根石を志とて  
チヤルセナ  
イ古小川人家ホロ又々味法屋甚し  
名岬を志とて人宗  
ニカルニシハトマクイト  
クイニ鳥の身ノ此鳥も  
四村ノ鳥ノ住ル  
在子母ノ鳥ノ今日  
見たり  
りりり

川カラス

信州木曾山中其外  
深山ノ山川等ニハマ  
アリ水辺ニ居テ小奥  
及虫ヲ拾啖フ日光中  
禅寺湖水ニ川車ア  
リ大サ雀ホトアリ黒  
トビ色ナリホ此種アリ

讀盡齋主人









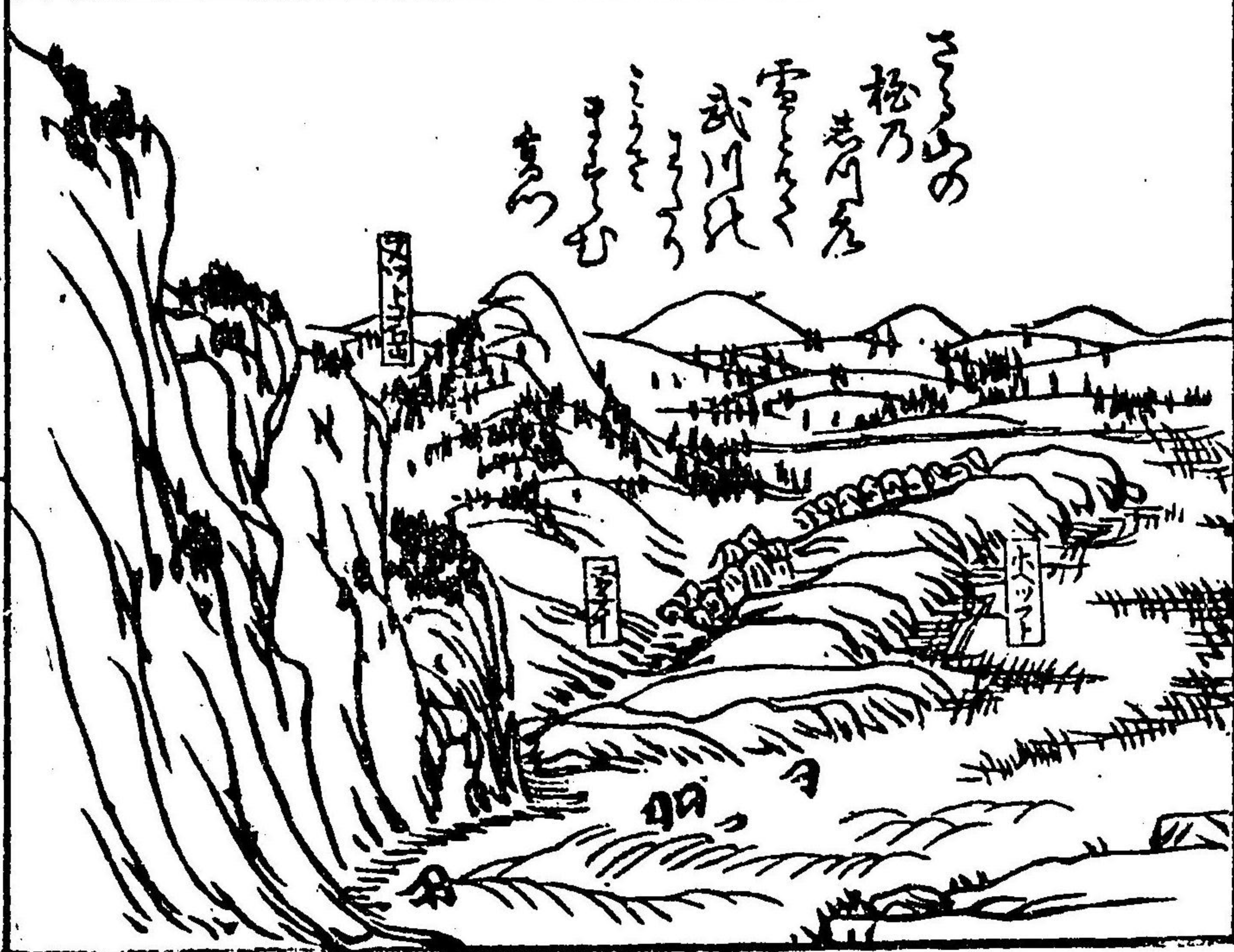
須臾のち大けをぬくを合く  
 我々を教導し給ふに  
 二之所とて外の大匠ありて  
 嗚呼とて其を泣き給ふた  
 事とて示給ふに給ふに余  
 別とて其の御と給ふに  
 事とて示給ふに給ふに  
 小成の時給ふに給ふに  
 嗚呼とて其の御と給ふに  
 事とて示給ふに給ふに



ホツト  
 ミフシ  
 ナイ  
 施望

あつた

世つるを勢い給ふに陸の  
 ツと小川人トナイ川ウツカウシ  
 ウ子ナイ川トサ川フニラニヨロ  
 ロライ山トサ川フニラニヨロ  
 宗系神の御と給ふに給ふに  
 小切と給ふに給ふに給ふに  
 くは是れ古む人の村と給ふに  
 ウケ山トサ川フニラニヨロ  
 集り又樹木の陰と給ふに



さうの  
 松乃  
 武川氏  
 武川氏  
 武川氏  
 武川氏









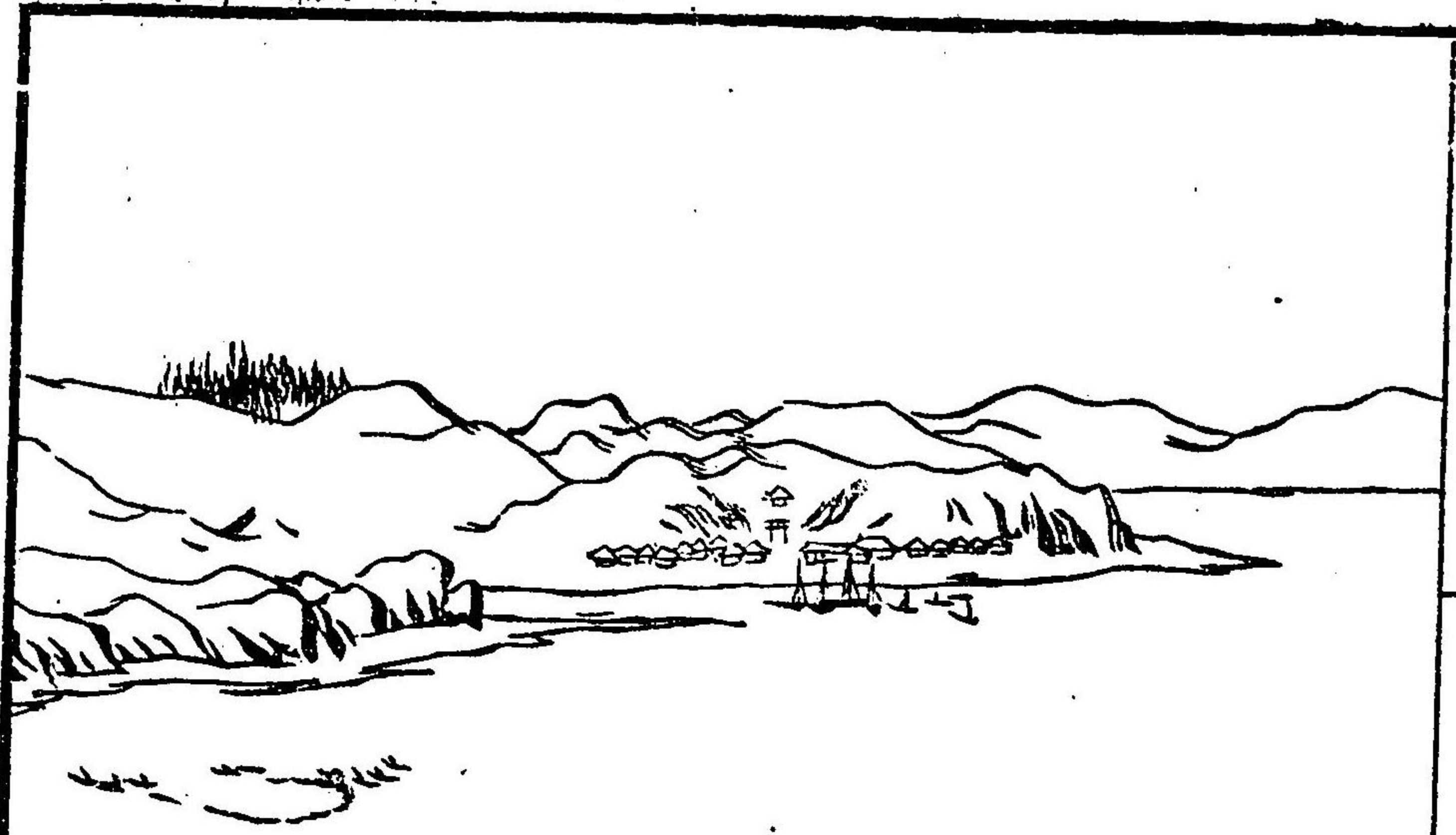












幽佛川 雲入瑣 瑞頭矢 津海如 雷壺歌 擊壺歌 醉九廟 前風雨 未頼鴨屋

たつとていふも依く此場をて概表  
地才一割業のゆゑに律をぬき置  
のトこそ七サルブト川こそ二  
タイ<sup>後</sup>名入シ<sup>は</sup>タイ<sup>山</sup>の  
ふ<sup>は</sup>ト<sup>方</sup>タイ<sup>山</sup>山口<sup>美</sup>  
十四セウ<sup>ウ</sup>ウ<sup>の</sup>和元<sup>成</sup>成<sup>を</sup>  
タイ<sup>小</sup>成<sup>社</sup>社<sup>ら</sup>を<sup>な</sup>な<sup>な</sup>  
又と年今<sup>の</sup>元<sup>は</sup>格<sup>を</sup>ウ<sup>エ</sup>  
チヤブ<sup>平</sup>平<sup>十</sup>モ<sup>バ</sup>ツ<sup>フ</sup>ト<sup>後</sup>ウ<sup>フ</sup>  
ニ<sup>千</sup>丁<sup>十</sup>百<sup>後</sup>回<sup>今</sup>ウ<sup>九</sup>  
九<sup>至</sup>は<sup>な</sup>る<sup>り</sup>ウ<sup>十</sup>ウ<sup>九</sup>此<sup>れ</sup>今<sup>の</sup>元<sup>と</sup>格



けい

たり

サレ<sup>所</sup>通<sup>り</sup>板<sup>を</sup>馬<sup>や</sup>  
大<sup>二</sup>少<sup>分</sup>飛<sup>信</sup>也<sup>土</sup>人<sup>在</sup>小<sup>分</sup>  
人<sup>別</sup>文<sup>政</sup>五<sup>及</sup>十<sup>二</sup>年<sup>十</sup>五<sup>人</sup>  
昆<sup>布</sup>組<sup>海</sup>流<sup>較</sup>元<sup>格</sup>格<sup>與</sup>多<sup>演</sup>形  
巳<sup>午</sup>向<sup>起</sup>平<sup>浪</sup>如<sup>島</sup>々<sup>仲</sup>格<sup>々</sup>  
小<sup>山</sup>の<sup>中</sup>林<sup>業</sup>社<sup>は</sup>文<sup>二</sup>丁<sup>一</sup>  
傍<sup>小</sup>天<sup>後</sup>中<sup>極</sup>子<sup>社</sup>々<sup>元</sup>  
相<sup>志</sup>家<sup>も</sup>小<sup>林</sup>業<sup>格</sup>々<sup>は</sup>元<sup>上</sup>  
屋<sup>サ</sup>レ<sup>の</sup>川<sup>場</sup>々<sup>を</sup>文<sup>化</sup>二<sup>十</sup>年<sup>此</sup>  
此<sup>格</sup>々<sup>を</sup>元<sup>上</sup>々<sup>を</sup>元<sup>上</sup>







山田の事なり 子持 *Shimada no koto nari*

本川と新原と無縁森両山を穿つてアトナイ川に子持の

コロ *Koro* 此の事なる様々の事なる事なる左ホリカ

モハツカ *Mohatsu* 此の事なる事なる事なる事なる

廿二日 此の事なる事なる事なる事なる事なる事なる

此の事なる事なる事なる事なる事なる事なる事なる

此の事なる事なる事なる事なる事なる事なる事なる

此の事なる事なる事なる事なる事なる事なる事なる

此の事なる事なる事なる事なる事なる事なる事なる

此の事なる事なる事なる事なる事なる事なる事なる

ナリ

△又ツケハツチのカタニツのシ名 石巻アキツの 此の事なる事なる事なる事なる事なる事なる

の事なる事なる事なる事なる事なる事なる事なる 此の事なる事なる事なる事なる事なる事なる

老人の事なる事なる事なる事なる事なる事なる事なる 此の事なる事なる事なる事なる事なる事なる

此の事なる事なる事なる事なる事なる事なる事なる 此の事なる事なる事なる事なる事なる事なる

此の事なる事なる事なる事なる事なる事なる事なる 此の事なる事なる事なる事なる事なる事なる

此の事なる事なる事なる事なる事なる事なる事なる 此の事なる事なる事なる事なる事なる事なる

此の事なる事なる事なる事なる事なる事なる事なる 此の事なる事なる事なる事なる事なる事なる

此の事なる事なる事なる事なる事なる事なる事なる 此の事なる事なる事なる事なる事なる事なる

此の事なる事なる事なる事なる事なる事なる事なる 此の事なる事なる事なる事なる事なる事なる

七月の事なる事なる事なる事なる事なる事なる事なる 此の事なる事なる事なる事なる事なる事なる

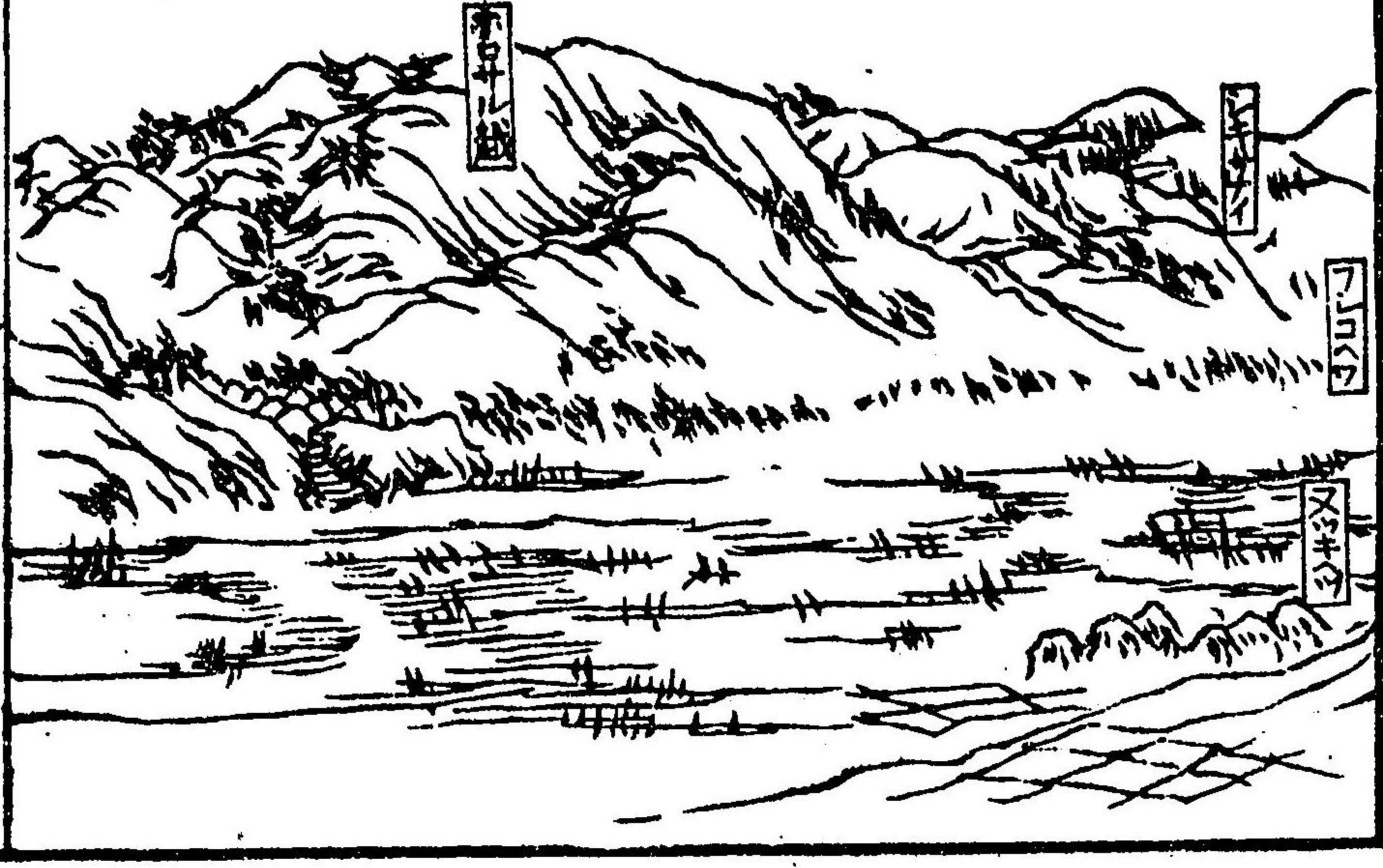


二役丸一丸りき又カ平と云本  
 川をよきとせニカルニタツイ此  
 邊を流るるふりてより新なる事  
 一余ハ上陸して又カ平の川を  
 不出しり 二役丸 川上の大町  
 中ノ末者小石丸 二役丸  
 源 二役丸 又カ平の川を  
 の流るるふりて又カ平の川を  
 高野の流るるふりて又カ平の川を  
 又カ平 川中丸 又カ平の川を



伊左と云流川の源と雪は二口  
 して二役丸 二役丸 又カ平の川を  
 源 二役丸 又カ平の川を  
 上 二役丸 又カ平の川を  
 川 二役丸 又カ平の川を  
 又 二役丸 又カ平の川を  
 又 二役丸 又カ平の川を  
 又 二役丸 又カ平の川を

南 靖 北 龍 流 雲 石 花 春 晚 耐 前 著 青 廣 範 迷  
 嶺 巖 黒 沙 山 中 楠 發 光 廷 射 村 藤 郎 瀬 詩 堂 録













元地くく友の言は何処くくもあそび知ちくくをなをききくを  
 何処くくもイタくくイタは板くくあ知くくラツクくさう  
 よりあくくを解くく解くくあ一宮のなをききくを  
 庭の掃除くくをききくを此知くくくお夕くく  
 小内地のくくあくく知くくくく

世くくくくく山くくあをくく一初乃くくあくく  
 四日早晨解纜て下るヒラテナイ川ホロケシヨマ  
 ナイ川流くくあ若樹くく一純空の風きよくく一ロクントエト山モルへくく  
 トナイ西小川此源くくツウホコマくくあ若夫の流くく夕ユシナイ川トユシナイ川  
 ホラツナイ川東ヲサツナイ川西若人若形名入くくく平くくあ夕ユシナイ川西モ平



くくく  
 たくく  
 くくく  
 くくく  
 くくく

若齋 蘭

東地春景

廿四







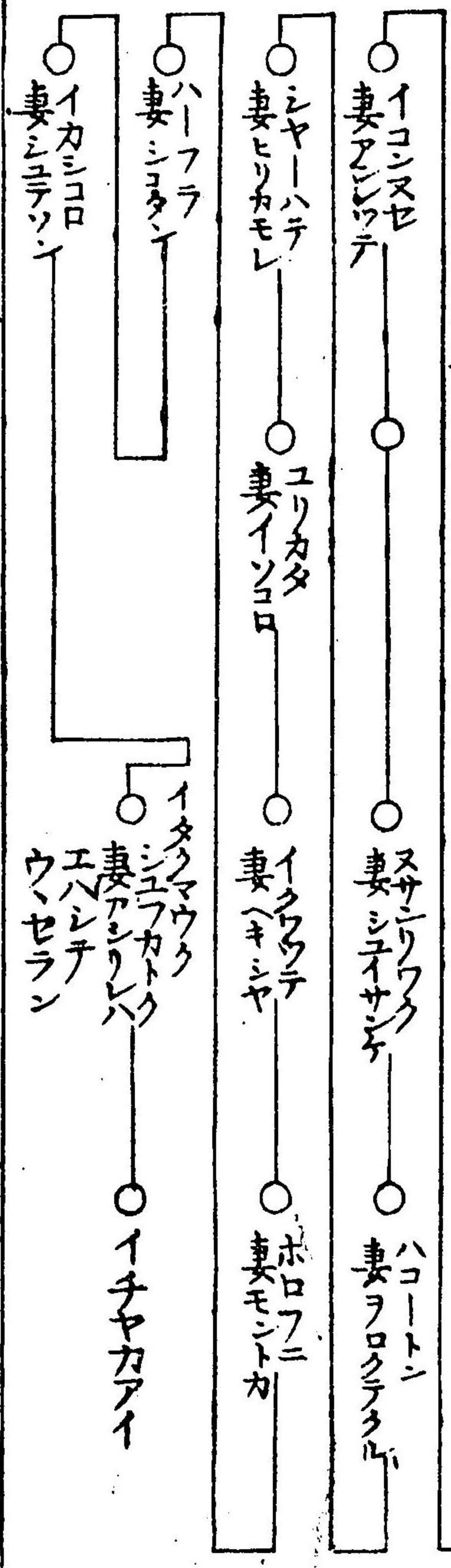




五日平明舟を獲トモ東ニラウ川沿くとユルクシヌタとまで一里半の一  
 面を流のせきも別しり事ありニケラウ子イ川ラウ子イ日タツコフニコロク  
 シナイ日タツコフ日小タツコフハナラシナイ西此山一ツの麓より舟をまらり  
 サント日エツロカニ日名火著し舟をまらり同名ユウフツと名を携し此  
 本津名織掃舟とてよく火と強まぬしチヤニコツ西カニ義経舟の標記  
 とり石敷名も出申コシカラ日チウニコロ日川トイフル西川ウヨツハ川ヒシラバ川  
 ヤノ子イ日新ラコトスサル日此処舟をまらり上りや合所より舟をまらりや  
 早く其まらり一匠とせり  
 舟は舟より上り上の方入アトニカ村人をもてアイクレウとイタクウシ  
 川小でラコトスサル川の川上を流しりや小舟をまらり舟の舟をまらり

志す其中心を大西日氏より建まきし中ひやく載しし程おはしり  
 大神のつとま一園よりちりちりお侍のおとをまらり  
 ビラカ村人<sup>家世</sup>より七名バフラ<sup>婿妻カ一</sup>の家よりまらり舟をまらり  
 舟をまらり我より出んまらり舟の舟をまらり舟をまらり舟をまらり

○降神 ○クニラクシ 神女





はるくヨロ川チウノコロ川ニラウ川ヤウツカ川等城て元上ノ市ニエニヨ

トシムニノアニハシラる早キ一其ノ行ハナキ小倉所ノ其ノ行ハ

ぬきハシムノノ人オシキハシムノ石場ノハ出役ノ一也其後ハ一海飯

ニシテノ者ト老ノ者トオシキハシムノ一也其ノノ奇縁ハオシキハ

オシキハシムノ者ト老ノ者トオシキハシムノ一也其ノノ奇縁ハオシキハ

千代ノ人田ノ者ト老ノ者トオシキハシムノ一也其ノノ奇縁ハオシキハ

ラムニヤチ  
藤原宮門

ラムニヤチノ者ト老ノ者トオシキハシムノ一也其ノノ奇縁ハオシキハ

オシキハシムノ者ト老ノ者トオシキハシムノ一也其ノノ奇縁ハオシキハ

オシキハシムノ者ト老ノ者トオシキハシムノ一也其ノノ奇縁ハオシキハ

小クナリノ別名ヲラムニヤチトシテオシキハシムノ一也其ノノ奇縁ハオシキハ

オシキハシムノ者ト老ノ者トオシキハシムノ一也其ノノ奇縁ハオシキハ

オシキハシムノ者ト老ノ者トオシキハシムノ一也其ノノ奇縁ハオシキハ

オシキハシムノ者ト老ノ者トオシキハシムノ一也其ノノ奇縁ハオシキハ

オシキハシムノ者ト老ノ者トオシキハシムノ一也其ノノ奇縁ハオシキハ

オシキハシムノ者ト老ノ者トオシキハシムノ一也其ノノ奇縁ハオシキハ

オシキハシムノ者ト老ノ者トオシキハシムノ一也其ノノ奇縁ハオシキハ

オシキハシムノ者ト老ノ者トオシキハシムノ一也其ノノ奇縁ハオシキハ

オシキハシムノ者ト老ノ者トオシキハシムノ一也其ノノ奇縁ハオシキハ

オシキハシムノ者ト老ノ者トオシキハシムノ一也其ノノ奇縁ハオシキハ

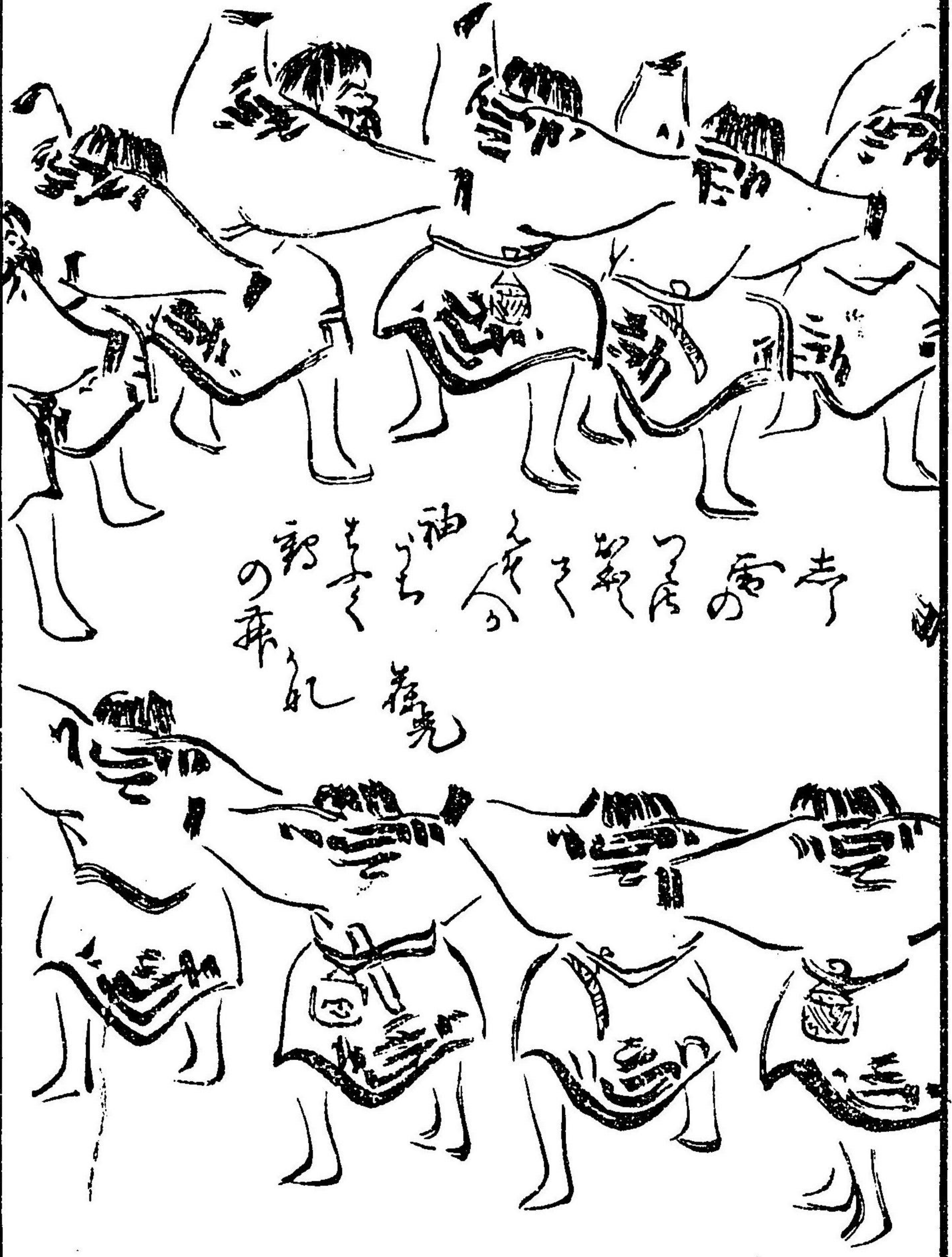


北里醉民

藤河画



寺の酒を飲んだ民の  
先づいふは酒の  
毒













南北二宗而作之者別有自然渾成  
之極殆出于太古之畫法者耶然則  
謂之極表畫可也我展觀之際聊書  
所見以為跋

南華逸史辨



學為樵者呼書





東蝦夷日誌四編

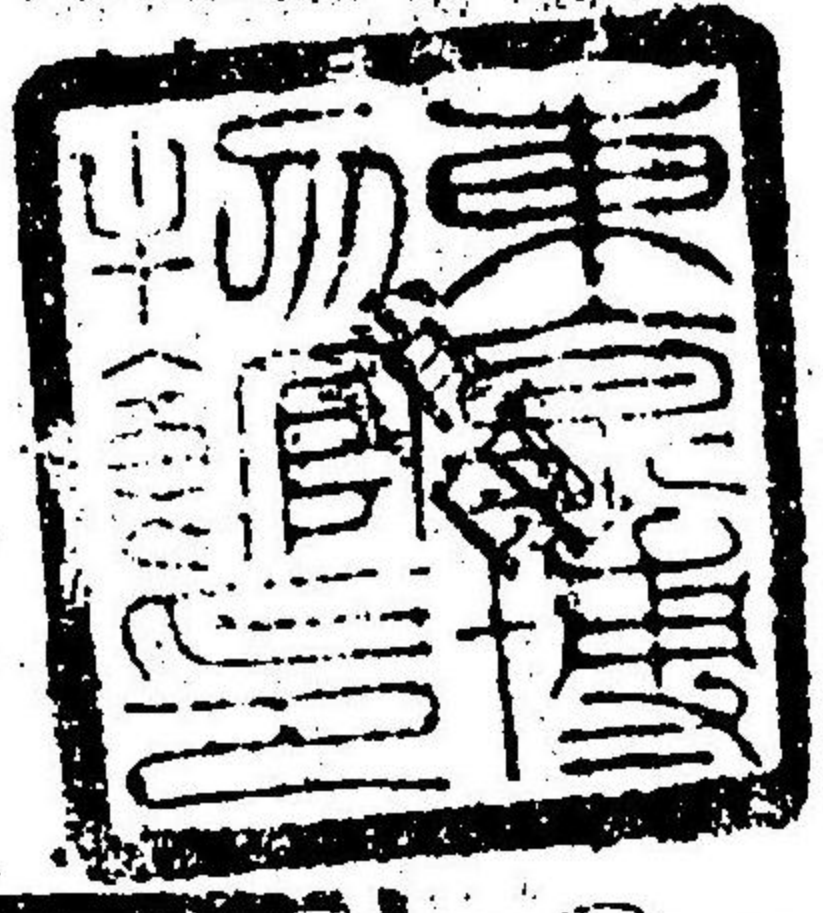
全

第八卷  
全七冊內第四

館書圖京東				和書門
三	三	三	地	
四	〇	函	類	
冊	號	架	函	類

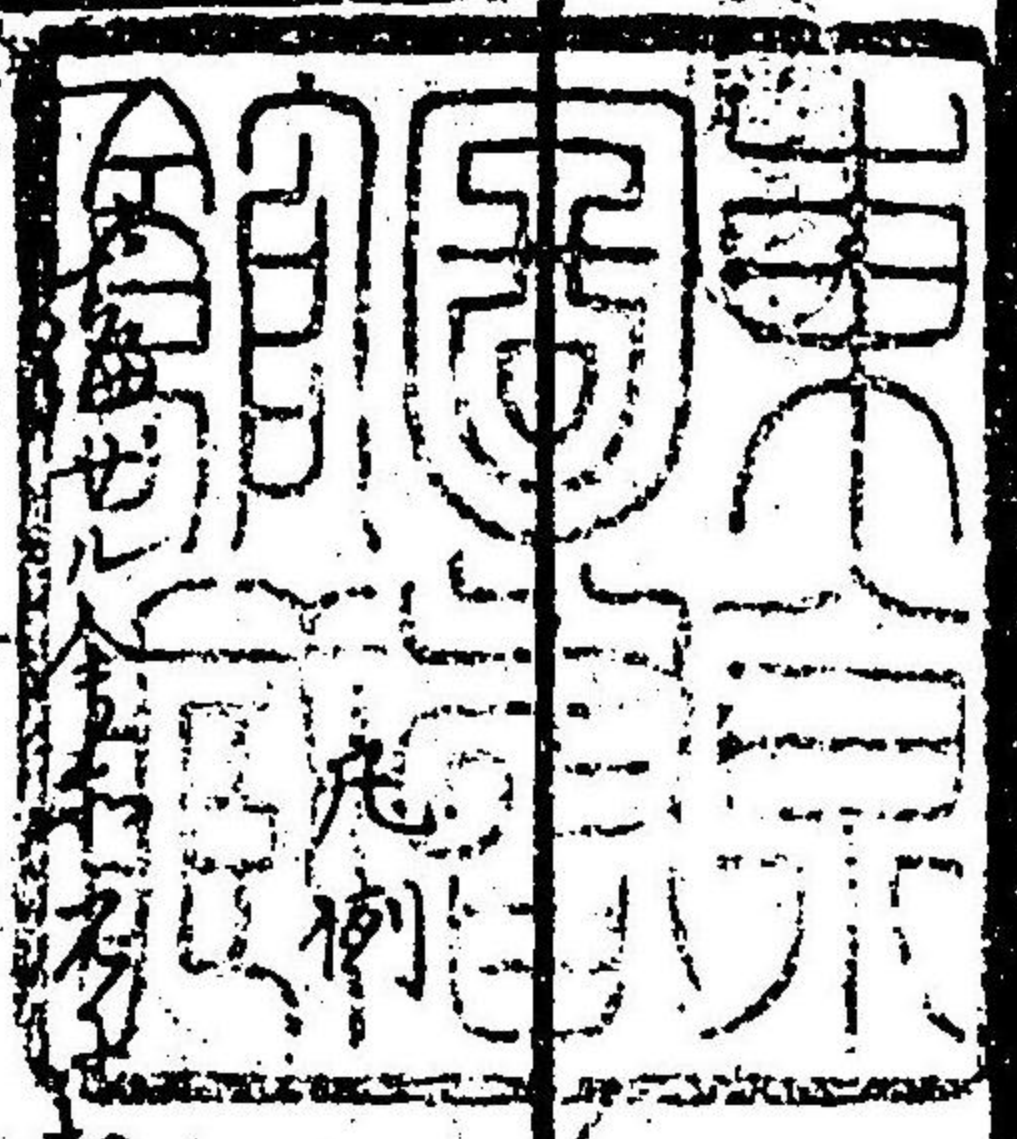


34  
8  
6



明治九年二月開

# 教育館



東西瓊夷山川  
地理取調紀行

# 東天

類行  
類行  
冊十  
函十  
冊十  
十冊

# 日誌

第四編

# 為多軍士樓首板



一 編り四編原延尉の在籍を録するも是も其人の在籍に多かれをくす  
公の概考の如きを知るもの多し其人の在籍を是は其の國に在りし人の在りて  
夏虫不知形類人をも亦其の怪むるも其の在籍の在籍を録するも其の在籍に  
一 地名の在籍を海峽とて之も其の在籍を録するも其の在籍に多かれをくす  
一 保久志 志 毘茶利志 紋別志 三石志 計利米布志 檜抄志  
一 海峽とて其の在籍を録するも其の在籍に多かれをくす

夏虫不知形類人をも亦其の怪むるも其の在籍の在籍を録するも其の在籍に



或曰安倍河原村上ありて...  
 今も如き者ありて...  
 其時二百多紀...  
 の如く変化...  
 大正と...  
 其家人...  
 其年...  
 其...  
 文久四...

東蝦夷日誌四編

伊勢 松浦竹四郎 著

○沙流下

日邊瞻日本雲裏望雲端遠游勞遠國長恨苦長安  
辨正姓恭大寶中 赴唐會玄宗潜邸

之日以善圍棋屢見思遇遂 卒被地 日本詩紀卷六 出會示何...

極目西南飛鳥絶不知日本在何邊...

只西南...

...

アイレシヨマフ...























ニイカツク  
らふふた  
あふふた  
あふふた  
あふふた  
あふふた  
あふふた



井

あふふた

あふふた

あふふた

あふふた

あふふた

あふふた

あふふた



上  
海  
布  
幕  
新  
十  
丁  
景  
真  
寫  
和  
平  
通



一所カキノニユマ日名入山名ノ垣のこくろ方と云ふナホロニセツフ州名義沃  
が廣きと云ふ山名ヲホシニセツフ州名義ヲ新ホロノツカ州と云ふ山名  
ありトホシノツカ州ヲコマサリ州餘の物もあるが山名と云ふは  
山名と云ふと云ふ山名

ニイカツフ 今五五九平 高木不渡や 赤い社 備前守 馬平 赤山人 赤山人 船と云ふ山名と云ふ山名

種取の沖越の時化雲の時と云ふ山名と云ふ山名

所右の給ありヒボクと云ふ文化の条呼ぶの山名と云ふ山名

名義ニイカツフの松指の山名と云ふ山名

地名の山名と云ふ山名

山名と云ふ山名

山名と云ふ山名

山名と云ふ山名

山名と云ふ山名

山名と云ふ山名

山名と云ふ山名

山名と云ふ山名

山名と云ふ山名

山名と云ふ山名

山名と云ふ山名

山名と云ふ山名

山名と云ふ山名

山名と云ふ山名







嵩山様申ふくニイカレハアヘツカニセイケ産物カ石門と云クニ股工  
 カイナレユニナイカシヤレ九ノイウレハカレバ九條とサレ順縁手ノ向テシカ成ると  
 上ノ愛<sup>カニ</sup>ニホク九條ホロシリ無と云減<sup>カニ</sup>ノるる山家ノ神位ノ域境ありと云テ  
 下ノ<sup>カニ</sup>チヤイヘツカニワツカクシ右ニユ子ナイ<sup>カニ</sup>切方<sup>カニ</sup>禪<sup>カニ</sup>本<sup>カニ</sup>粟<sup>カニ</sup>麥<sup>カニ</sup>麦<sup>カニ</sup>よく  
 切方<sup>カニ</sup>禪<sup>カニ</sup>マウ<sup>カニ</sup>日<sup>カニ</sup>ク<sup>カニ</sup>ツ<sup>カニ</sup>タル<sup>カニ</sup>人<sup>カニ</sup>以<sup>カニ</sup>て<sup>カニ</sup>川<sup>カニ</sup>中<sup>カニ</sup>た<sup>カニ</sup>く<sup>カニ</sup>ぬ<sup>カニ</sup>れ<sup>カニ</sup>と<sup>カニ</sup>も  
 人<sup>カニ</sup>家<sup>カニ</sup>少<sup>カニ</sup>使<sup>カニ</sup>イ<sup>カニ</sup>タ<sup>カニ</sup>キ<sup>カニ</sup>口<sup>カニ</sup>、<sup>カニ</sup>あ<sup>カニ</sup>く<sup>カニ</sup>と<sup>カニ</sup>常<sup>カニ</sup>と<sup>カニ</sup>事<sup>カニ</sup>我<sup>カニ</sup>ノ<sup>カニ</sup>妻<sup>カニ</sup>と<sup>カニ</sup>考<sup>カニ</sup>し<sup>カニ</sup>知<sup>カニ</sup>め<sup>カニ</sup>た<sup>カニ</sup>れ<sup>カニ</sup>と<sup>カニ</sup>一<sup>カニ</sup>を<sup>カニ</sup>也<sup>カニ</sup>也<sup>カニ</sup>也<sup>カニ</sup>  
 能<sup>カニ</sup>知<sup>カニ</sup>く<sup>カニ</sup>山<sup>カニ</sup>ノ<sup>カニ</sup>根<sup>カニ</sup>砂<sup>カニ</sup>は<sup>カニ</sup>こ<sup>カニ</sup>一<sup>カニ</sup>我<sup>カニ</sup>ノ<sup>カニ</sup>鬼<sup>カニ</sup>妻<sup>カニ</sup>ノ<sup>カニ</sup>せ<sup>カニ</sup>と<sup>カニ</sup>も<sup>カニ</sup>も<sup>カニ</sup>と<sup>カニ</sup>日<sup>カニ</sup>ノ<sup>カニ</sup>也<sup>カニ</sup>



嵩山人  
 法教林  
 攝山  
 龍山  
 後山  
 日向山  
 弁山  
 可尾山

西阪若生















上つて去所方是道と雖形も方且と競斗と云ふソウホヨウハケビノ味ヘン  
 ケビノ味子のまはるまゝ又岩家ナイ花と云ふ又岩屋と云ふミイ子イ花ヲニカレ  
 有る大崖壁雪中梅の影の如く健と傳ふと云ふ本和すゝ岩角子鳥を記  
 出るとキヘナイ花の如く寛文年号錫者凡没落は金平毒・向山如く此系  
 お人と吾子妙花を推食ひ或時毒氣の鳥類を推し其氣を喰ふと記す  
 喰し此妙子花をトナイ花と云ふイツケナイ花子トナイ花アツカヤとハ味  
 出子アツカヤと云ふと云ふ頂梅花と云ふ梅斗と云ふの香気海邊花は凡  
 右邊節もくも原一丈と云ふ山雪と云ふエニボク岳と云ふ山雪の如く  
 おくお花は是れを成し生根もねるも夜二股と云ふ  
 花づゝ出。就る相もわたりきてと云ふ人との如く梅も花も凡



芳齋

芳齋  
 山雪の如く  
 頂梅花と云ふ  
 梅斗と云ふ  
 の香気海邊花は凡



















かたはらけ  
よまらふ  
はらふ  
か  
か  
か



かたはらけ  
よまらふ  
はらふ  
か  
か  
か

聖  
池  
寺  
印

















方々月形の子にツカミを印し柳條の内より官指跡十九葉より老の指  
 指跡ありと雷芥隈旭旗石肉忌の夕道に之を一雨の烟條に今承えよはる  
 夕根の体層と云へく紋別石の夕道は之を紋別石とす知あふよはる  
 以族を化ふるは皆々皆族也るものやと云ふ。四上指の字皆備指道  
 一トし船水底の石肉忌の時を馬とて指の程程ナライ性お異疑多しと  
 七日成解主人之石少候スカレを連出を西原ヒイシユンビハツ人モウシユンバラ  
 コツツハロバコツツバコツツヤバコツツ岳と云ふあり鐵々トウブシ  
 ナイ部キナチヤウシツウソソニコウレ 人指 ぶてイマニオミヤナサシヤ  
 此度は舞のよしを紳さ切取まきの串と刺し横きと串とまきのまき  
 化を石成止と云ふ成し下せし串の串の串の時 山岩中より折る人

川の西に飛りしと今ニ丈斗の山を相は石の山に柳條様五葉松杓  
 其原初葉なる主人の娘を云ふ山より草及何一様を来しと主人  
 而をその草と本草ユナワと云ふ。名義イマニ串のこくハ四イマニトカク  
 シナイハキムンビツハは一里山より四面山より陰作川銀と云ふ  
 道シ又フシユツハシヤモナイ 赤川ルビシベケリツツ キムニコダン 赤川  
 是道の不細行りホロケナシハチヤシコツ 体洵念欠族石道官指跡多程  
 是た若山より改川中せよ。シカルブナイハユウレハハチヤシコツの尾  
 多クコトコチシハ樹木は捕獲旭葉葡萄の少くは紅葉を伴せし  
 一形より思橋より風系より人方よりれを本はと別し一形を伴し  
 落るる葉を採りしよゆると云ふは一入射の音を伴ふ





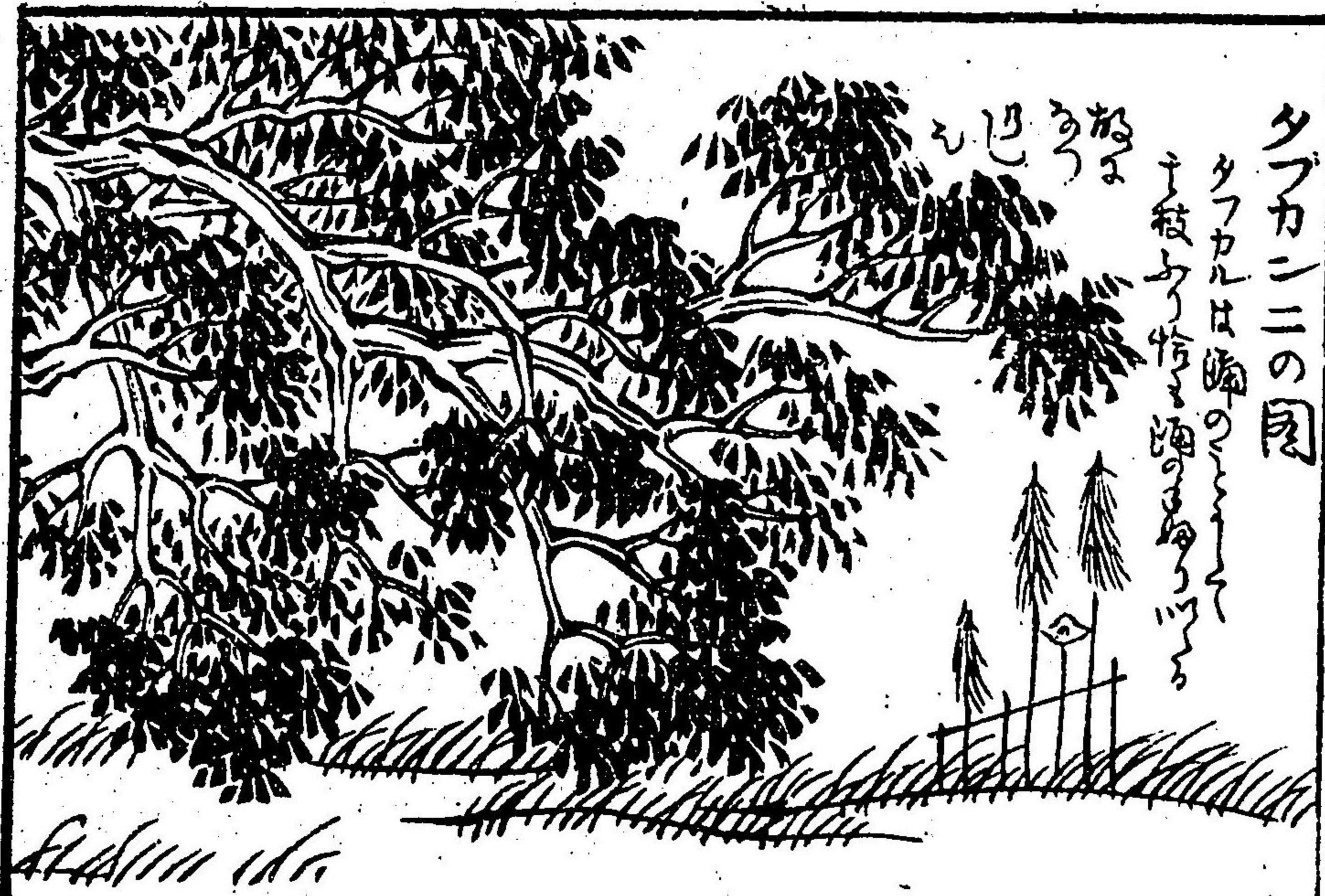




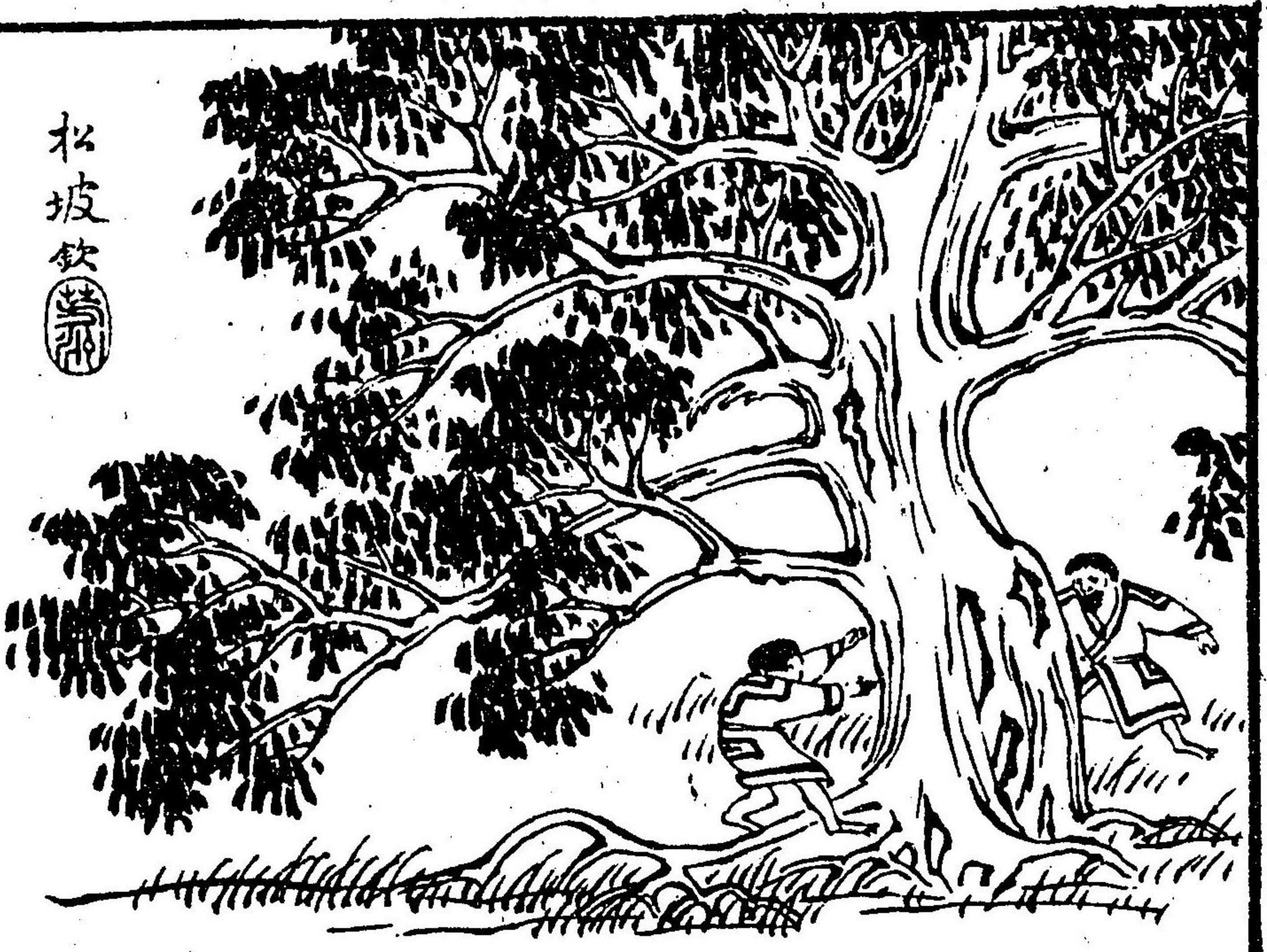


ツツカニニの園

ツツカニニの園の風景  
十数本の松が並んで



多く城々又キベツツカニニの園の  
傍に夜夜多しと云ふは  
焼捨しやまらぬと云ふは  
よきと云ふは一ツツカニニの園  
は川の中と云ふは石が  
甲斐多く樹の赤物松葉類の  
六白松は二股せん九ツツカニニの園  
松山越えまゝと云ふは  
色でニカラツツカニニの園  
と見るとは後序凡そし撰者葛花



松坡欽

樹形多々あるは松の古家々々川の上の事  
よまがとる二股右ハシケリマ右川原神集  
よまがとる二股右ハシケリマ右アツカニニ  
ナイカニニシ、共々係神集  
は松の産大岩洞多く是より出  
天下の奇観ありといひ松の樹立  
の時は多しといふは  
川原赤崖下より碑を曰うツツカニニ  
は松の美しき松の葉の風は松の  
時より新き故文化の松の松の松







欲求復一齊不堪衆苦唯無志  
郊外亂頭雅  
鳴呼鐘子不生伯牙死  
及人身如浮海焦  
尾形結儘亦好能言  
彈老少聽去還若此  
琴三  
琴且高曲自古  
無當宜

古琴篇贈松生 黃郊西齋

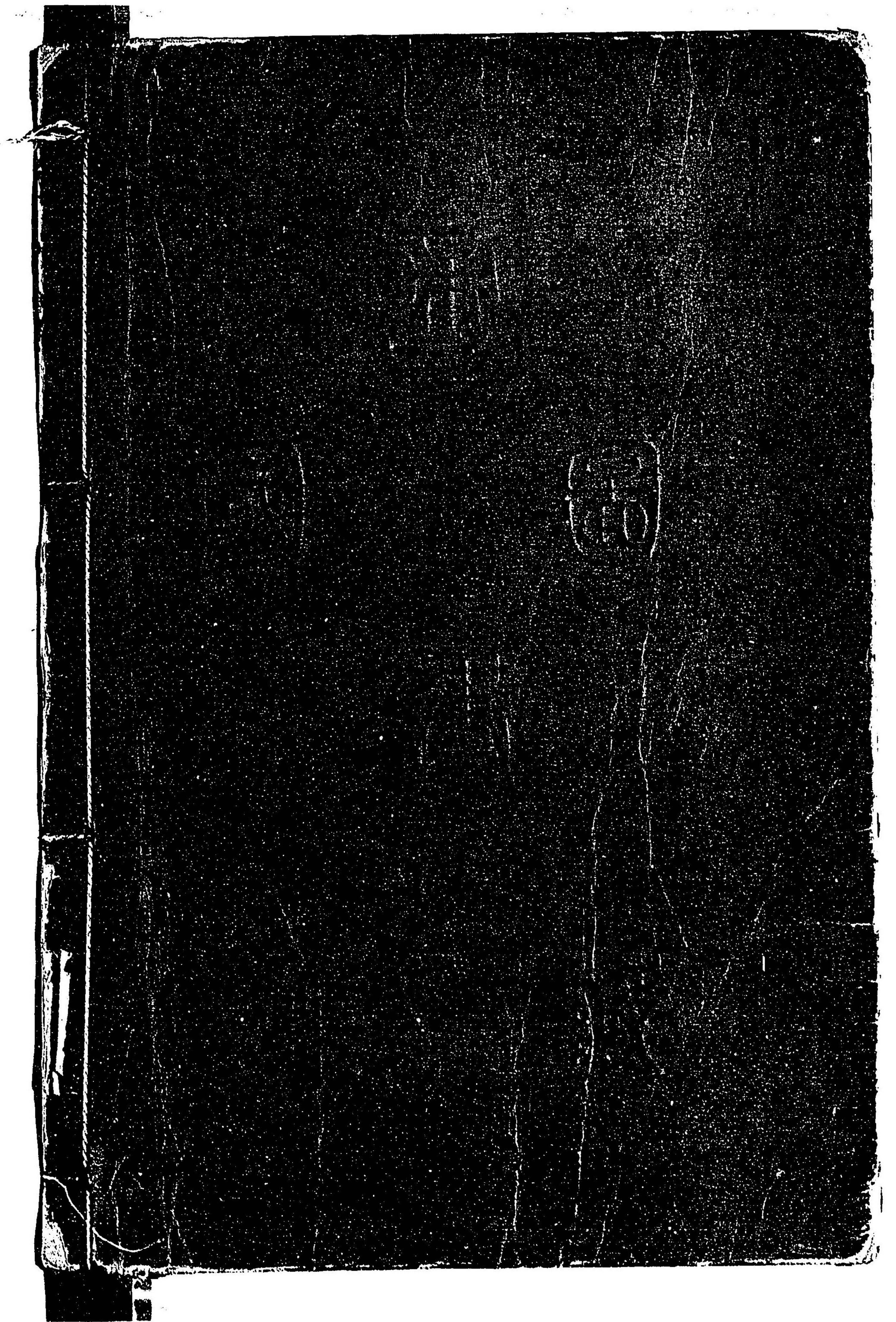
慶元三年及月 二  
年  
一  
月  
二  
日  
書  
于  
西  
齋





124
11
24







東坡志林

卷四

